

ICTを活用した授業の改善

～より楽しくわかりやすい外国語活動の授業をめざして～

大石田町立亀井田小学校 井澤 宏幸

1 テーマ設定の理由

本校のコンピュータ室には児童用コンピュータが16台あり、すべてがネットワーク化されている。コンピュータ室は理科室と共用で、おもに理科や総合的な学習の時間の情報収集などに活用している。他教科でも、学習のまとめや発表資料の作成などで活用するときは、コンピュータ室に移動して使用することになる。しかし、これらの活用方法は、コンピュータがもつ様々な可能性のほんの一部でしかないと思う。

普通の授業をふりかえてみると、コンピュータ室だけでなく普通教室でも児童の興味・関心をひきつけたり問題意識をもたせたりするためにコンピュータを使って資料を提示すると効果的な場合や、また、コンピュータやOHCなどを使って児童の作品を全体に見せながら発表させたり、作品の見てほしいところを焦点化して見せたりすると効果的な場合がある。外国語活動で英語表現をつかって実際に友だちとコミュニケーションをとる活動や、「ショー アンド テル」では、音声だけでなく動画として記録し、自分たちの聞き方・話し方を客観的にみることでより効果的な自己評価が期待できる場合もある。しかし、現状は、コンピュータをどのように活用できるのかについて漠然としか知識がなかったり、より効果的な活用方法については分からなかったりする。つまり、今まで、有効なのは分かっているつもりだが、普通の授業のどの場面で、どのように活用すると効果的なのかをじっくり学ぶ機会がなかった。また、現在の教室環境では、機器を準備するだけで手間がかかったり、あるいは機器そのものが整備されていなかったり、普通教室へのLAN整備がされていなかったりという理由から、ICTの活用に消去的だったということも事実である。

そこで、研究の一年次は、平成23年度から完全実施予定の外国語活動や、校内研究で取り組んでいる国語科の授業の中で、ICT機器や視聴覚教材の活用方法や活用するための環境整備に視点を当てて、授業改善に取り組んだ。研究の二年次

は、研究をより焦点化する意味で外国語活動に絞り、より楽しくわかりやすい授業にするためにICT機器の活用実践を積み上げながら授業改善に取り組みたいと考えた。

2 研究の仮説

〔仮説1〕

ICT機器を資料提示の道具として効率よく使用すれば、より楽しくわかりやすい授業が展開できるであろう。

〔仮説2〕

聞く・話す場面やそれをふりかえる場面でICT機器をうまく使用すれば、自己理解が深まり、学習への意欲も高まるであろう。

〔仮説3〕

ICT機器が効率よく使えるように環境を整備することで、指導者の指導力を広げ、授業改善につながるであろう。

3 研究の方法と計画

仮説に基づき、以下の視点で研究を進めた。

〔仮説1〕に関して

- (1) 外国語活動の教材「英語ノート」や「Genki English」について、その内容や特徴についてまとめる。
- (2) 授業での活用を図る。
- (3) 児童の活動の様子を観察し、考察する。

研究の二年次は、期間限定ではあるが、ボード型の電子黒板を借用することができたので、外国語活動における電子黒板の活用方法についても研修を進めていく。

〔仮説2〕に関して

- (1) 聞いたり話したりする活動での、発音練習や会話モデルとなるような視聴覚教材の準備
- (2) 聞く・話す活動を記録に残し、児童の自己

評価につなげるための、ICT機器の活用方法を検討する。

どのような姿を目指せばよいのか、実際の発音のモデルを動画や音声で提示できるような資料を発掘し、準備していく。また、実際の児童の学習活動を画像や動画で記録し、学習の振り返りなどで活用することで、自己評価につなげていく。

〔仮説3〕に関して

(1) 普通教室へのLAN整備を進め、インターネットやICT機器が活用できるように環境整備していく。

(2) 校内にあるICT機器や教材を確かめ、活用しやすいような環境整備を考えていく。

できるだけ、普通教室でLANが活用できるように環境整備を進めていく。研究の一年次は、6年教室への整備をしたので、二年次は順次他教室へも整備していく。

4 研究の実践

(1) 外国語学習の教材について

①「Genki English」について

大石田町の小学校では外国語活動の共通教材として「Genki English」を購入している。年間指導計画も共通のものが作成されており、計画に沿って、「Genki English」を活用していくことになっている。この教材の特徴は、以下のような点が挙げられる。

◆現在9枚のCDが発売されており、保育園・幼稚園の年長から中学一年生くらいまでを対象としている。

◆ボーカル付きの英語の歌、ボーカルのないカラオケ、さらに、パソコンに入れると、CD-ROMソフトとして使うことができる。

小学生段階で、しかも、実生活で使用する必要性が乏しい中で外国語、特に英語の多くの表現にふれる際、興味・関心をもって学習に向かえるような手立てがとられているCDであると言える。

外国語活動のねらいから考えると、パターン・プラクティス（表現習得のために繰り返し行う口頭練習）やダイアログ（対話）の暗唱に偏重して指導したり、「聞くことができる」や「話すことができる」などのスキル向上のみを目標とした指導が行われたりすることは、ねら

いと合致しない。しかし、外国語を使ったコミュニケーションへの積極的な態度を身につけるための導入という意味では、興味・関心をもって外国語、特に英語の学習に向かえることは大切なことだと考える。

②英語ノートについて

学校に配布された英語ノート関連教材としては、英語ノート1・2、指導資料、CD、デジタル版である。英語ノートの内容をみると、各単元がおおよそ4時間で構成されており、第4時には児童が英語を使って話す活動が計画されていることが多い。児童が話せるようになるためには、第1時から第3時の間にそれができるといったような技能を身に付けさせることが必要になる。しかし、無理な発話を求めていくことが外国語活動のねらいではないことを考えると、英語ノートのデジタル版などを活用し、「聞く」体験や外国の文化などに興味をもってふれる活動をたくさん取り入れながら学習を進めていきたいと考える。

③Webサイトについて

インターネット上には、外国語活動の先進的な実践がたくさん紹介されている。また、授業で活用できる外国の文化などについての情報やデジタルコンテンツも豊富である。著作権について注意しながら、学級の児童の興味・関心に合わせて取捨選択して活用していきたい。

(2)外国語学習の教材の提示方法について

以上のような「Genki English」や英語ノート、デジタルコンテンツの特徴を授業で活かすために、パソコンの画面を大きく映し出すことが有効である。本校の教室環境では、プロジェクターを使用し、教室に備え付けの吊り下げスクリーンに映し出していくことができる。また、本年度は、教員の研修用にスクリーンボード型の電子黒板を借用することができたので、使用期間は限定されたが、授業で活用することがで



プロジェクターで投影するボード型の電子黒板の使用。

きた。先行研究を調べてみると、電子黒板でできることや、そのメリット・デメリットなどを知ることができる。特に注目したのは、書きこみ機能と保存機能についてである。デジタルペンを使って、電子黒板に投影した教材に書きこむことができる。児童の手元にある資料と同じものを電子黒板上にも提示し、書きこむ場所や内容を確認しながら学習を進めることができるので、児童はとても分かりやすい。さらに、授業で電子黒板上に書きこんだことをデータとしてそのまま保存しておき、授業の振り返りや次時の導入などで提示することができるという機能である。外国語活動では、耳や目で英語の表現にふれ、慣れ親しむ学習活動が多い。そのため、学習プリントを使っての知識理解のための書き込みというよりも、学習内容に対する児童の発言や気付きを提示した教材に書きこむ場合などに有効な機能ではないかと考えられる。

<実践1> (研究一年次)

●言語や文化について理解を深めるための実践1

- ・学年、教科：6年 外国語活動
- ・単元：Lesson 5 世界の食べ物を知ろう
- ・目標：①世界の食文化の違いについて気づくことができる。
- ②ものを勧めたり勧められたりした時、また、ものがほしい時などの場面で使う英語表現で友達と会話をしようと思えることができる。

本時では、ファストフードのマクドナルドのメニューを通して、世界の食文化の違いについて考えることができることを目標とした。

目標を達成するために、次のような指導過程を考えた。

- ①「Genki English」のWebサイトで、食べ物の一覧を見ながら Balloon Game をする。
- ②朝食で何を食べたいかを聞く表現の歌を「Genki English」CDで聞く。
- ③世界中のマクドナルドのメニューをみて、どこの国のメニューだと思うか考える。
- ④オリジナルの大石田バーガーを考えて紹介する。

①では、4人のグループを作り、頭文字がアルファベットのA～Zの食べ物の名前を、交替しながら発音していくようにした。その際、風船が床

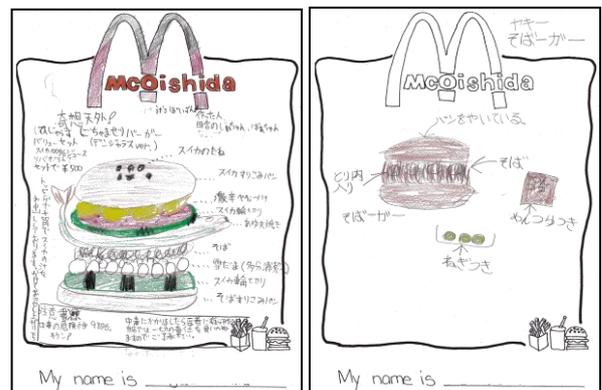
に落ちないように上へ打ちながら発音するようにさせた。楽しい活動であったが、風船を落とさないようにあわてたので、カタカナ英語になってしまった。活動のねらいは何かをはっきりさせておく必要があった。

②では「What would you like for breakfast?」の歌を聞きながら、どんな食べ物が、どの順に出てくるのかを聞き取り、食べ物のカードを並べさせた。「cereal」と「salad」が区別しにくく、聞き間違う児童がいた。最後まで聞くと合わなくなるので、間違いに気づいて並べ直す姿があった。

③では、「キウイバーガー」や「プルコギバーガー」、「マックケバブ」などのメニューから、どこの国のマクドナルドかを考えさせた。「キウイ」や「プルコギ」、「ケバブ」など、聞いたことのある食べ物を手掛かりに考えるようにした。答え合わせをするにあたって、Webサイトから各国のマクドナルドの店や実際のバーガーの画像を集め、パワーポイントにまとめた教材を作った。それぞれの国の歴史や文化がマクドナルドのメニューに表れていることを確かめた。

④では、③で気づいた食文化の違いを受けて、地元大石田の特産物を使ったオリジナルバーガーを考えさせた。スイカやそばを使ったオリジナルのバーガーを考え、ネーミングにも「そばーガー」などの工夫がみられた。本時の中で全員が発表する時間はなかったが、できた児童は書いたプリントを見せながら発表した。

「Genki English」のWebサイトにはCD-ROMに入っている歌の様々なカードなどがカラーで紹介されているので、授業の中で直接サイトにつなぐことができれば効果的に活用することができた。画像や簡単なアニメーションが児童の興味を引き付けていた。



この授業を通して、以下の点について改善が必要だと感じた。

- (1)英語表現を使ってコミュニケーションをとる活動の充実
- (2)CDやカードの活用の仕方
- (3)発表の際のICT機器の活用の仕方

(1)については、授業のねらいによって、英語にふれる時間、英語表現を使って人とコミュニケーションをとる時間を充実させていくことが必要である。本時では食文化の違いに気づくことが主なねらいであったが、それでも、教師の問いかけに答える時や、カードを並べるときに英語を発音しながら並べるなど、1時間の中で英語を発する機会を確保していく工夫が必要だと感じた。

(2)については、CDの中の教材やその他のカードなどをそのまま使うのではなく、教師が提示したいようにパワーポイントなどに取り込んでおくだけでも、様々な提示の仕方ができるようになることが分かった。CDに入っている歌だと、聞いているうちに出てくる単語の順番を暗記してしまい、聞きとることに集中しなくなることも考えられるが、単語カードをランダムに再生すれば、改善できる。また、音声だけ、画像だけと提示の工夫すれば、活動の幅も出てくる。

(3)については、児童の作品をデジタルカメラで撮影してプロジェクターを通して紹介したり、実物投影機のような機器を使って提示したりするなど、児童がより注目しやすいような発表のさせ方を工夫していく必要があると感じた。

<実践例2> (研究二年次)

- 言語や文化について理解を深めるための実践2
- ・学年、教科：4・5年 外国語活動
- ・単元：時間割を作ろう
- ・目標：①世界の小学校の学校生活に興味をもつ。
②自分たちが作った時間割を英語で伝えようとする。

第4時でオリジナルの時間割を紹介し合うという単元のゴールに向かうために、日本と他の国の教科や子どもたちの興味の違いについて知る学習活動を大切にしたい。参考にしたのは、「学研キッズネット」というWebサイトの中の「ハローワールド」や「知って友だち 世界の国ぐに」というページである。その中から次の2つを取り上げた。

- ①国別「好きな教科ベスト3」
- ②日本にはない世界の時間割

①ではまず、自分の好きな教科ベスト3、次に学級のベスト3をまとめた上で、「ハローワールド」を参考にしながら日本・中国・フランス・インドの子どもたちの好きな教科ベスト3について紹介した。

	Our class	Japan	China 瑞金路第二小学校	France アベ・マリア通り 小学校	India ブルーム・パブリック ・スクール
1		P.E.	Math	Math	Math
2		Music	Chinese	P.E.	English
3		Arts and Craft	Arts and Craft	Science	Science

本時では、教科名の英語表現について練習した後でこの学習を行い、答えの発表は英語で行った。児童は、教師からの英語でのヒントや答えを何度も聞くことで、英語の表現に慣れ親しむことができた。児童の授業後の感想をみると、自分たちがあまり得意ではない算数(Math)が3つの国とも好きな教科第1位に挙がっていることに驚くとともに、国語(Chinese)や英語(English)、理科(Science)などの教科が入っていることに気付き、自分たちとずいぶん違うことを強く感じ取ったようであった。

②では、「知って友だち 世界の国ぐに」を参考に、オーストリア・インド・フィンランド・アラブ首長国連邦にある意外な教科をクイズ形式で紹介した。

Which is true in United Arab Emirates ?	
They learn to ride a camel.	
They have a nap time.	
They go on a hunt.	

クイズを教師が英語で出題し、数回繰り返した。その後、内容理解の助けとなるようにパワーポイントでイラストを表示した。イラストはgoogleの画像検索から引用した。児童は初め、知っている言葉を探しながら聞いていたが、初めて聞く英語表現に戸惑ったようだった。イラストを表示しながらクイズ形式に進めたことで興味をもつことができたようである。英語の理解を助ける手立てとして、イラストなどは有効な手段であり、ICT機器を活用して表示できる教材開発や、提示のタイミングなど、授業のねらいに応じた活用方法をさらに工夫していくことの大切さを感じた。

- ・単元を構成するにあたって参考にした資料
『英語ノート・5年 35時間の teacher talk』
著者：渋谷 徹 発行所：明治図書出版

<実践例3> (研究二年次)

●積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をねらった実践

- ・学年, 教科：4・5年 外国語活動
- ・単元：いろいろな衣装を知ろう
- ・目標：①自分の好みを伝えて楽しく買い物をしたり, 相手の好みに関心をもったりしようとする。
②英語を使って色や衣服についての自分の好き嫌いを相手に伝えようとすることができる。
③世界の国々の様々な衣装に興味をもち, 日本の文化との違いに気付くことができる。

本単元は, 買い物という場面設定の中で, 衣服を売ったり買ったりする活動を通して, 相手に自分の思いを伝え合う楽しさを体験することをねらいとした。

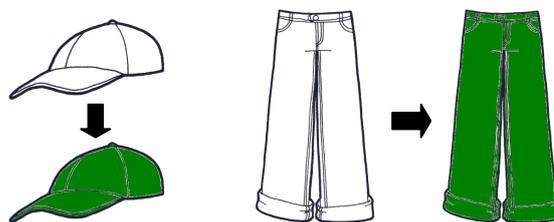
単元計画は全4時間とし, 店員 (shopkeeper) とお客 (customer) に分かれて買い物をする活動や, 買った物を友達に紹介する活動など, 英語を発音する活動ができるようにする。そのために扱う言語材料は「色」と「衣服」の単語である。外来語として定着しているものも多いため, 興味をもって学習することができると考えられる。しかし実際に使用する場面では, 二つ以上の単語をつなげて「orange T-shirt」(オレンジ色のTシャツ) や, 「blue sweater with big star」(大きな星が描かれた青いセーター) などの表現ができるようにしていきたいと考えた。

英語を発音しながら友達とコミュニケーションをとろうとする姿をめざすために必要な学習として次のような学習を考えた。

- ①「色」や「衣服」の単語を, できるだけ無理なく発音できるように定着させる。
- ②相手と気持ちよくコミュニケーションをとることができるために必要なことを考える。
- ③実際の活動場面を振り返り, よりよいコミュニケーションの方法について考える。

①ではまず, 実践1の課題(2)を解決するために, 「色」や「衣服」のイラストや画像を準備した。

英語ノートのデジタル版をパソコンに入れてCDを開くと, 英語ノートと同じイラストなどが取り出せる。本単元で使用した衣服のイラストには色がついていなかったため, ペイントソフトで必要な色を付けて使用した。



また, 「色」のイラストについては, Webページで紹介されているデジタルコンテンツの中から選んで使用した。初め, それぞれのイラスト(画像)を印刷し, フラッシュカードのように児童に提示してみた。しかし, 例えばオレンジと茶色などで, パソコンの画面上の色と印刷後の色が微妙に違っており, 児童が迷う時があった。そこで, パソコン上の画像をプロジェクターで提示することにし, 提示のしかたを検討した。まず, パワーポイントに画像を貼り付け, スライドショーの自動再生でフラッシュカードのように提示してみた。この方法でも発音の練習をするには充分であったが, この方法だといつも同じ順序でスライドが再生される。そこで事前に再生する順序を決めて再生されるパターンを数種類準備しておいた。

②では, shopkeeper と customer に分かれて, 好きな衣服を買い物する場面を設定し, 児童に体験させる。その際, 大切にしたいことは, 「視線を合わせること (eye contact)」, 「笑顔で話すこと」ということである。話し手の気持ちを考えながら聞くことは, 互いに気持ちの良いコミュニケーションを取るために, とても大切なことであることを繰り返し指導していく必要がある。もう一つ大切なことは, 「はきはきと話すこと」ということである。買い物する場面では, 英語の表現を使ってコミュニケーションをとることを求めていくが, すべてを英語で言うことができない場合が多々あると考えられる。ジェスチャーをするなど, 言葉によらないコミュニケーションも大切にして, 自分の思いをはっきり伝えることの大切さも確かめていきたい。これらのことを確かめるために, パワーポイントを使って自作の教材を作成した。本時では, どのような shopkeeper の店で買いたい画像を見ながら考え, 大切なことを確かめるようにした。



③では、活動の前に確かめた、コミュニケーションをとる際に大切なことが、実際の活動の中でできたかどうかをデジタルカメラで静止画や動画で記録し、授業後に振り返ろう考えた。デジタルカメラをプロジェクターに直接接続して再生する方法も考えられたが、使用しているデジタルカメラやプロジェクターによっては、動画再生がうまくできないこともあったようである。本時の中では振り返る時間をとれなかったのだが、次時で画像や動画を見ながら、気持ちの良いコミュニケーションをとるために大切なことについて振り返ることができた。



5 成果と課題

【成果】

〔仮説1〕について

- ・フラッシュカードを使って映像と言葉を結びつけながら発音する活動が、ICT機器を使うことでよりスピーディーに、また、ダイナミックに行うことができるため、児童は集中し、意欲的に学習することができた。
- ・電子黒板で教材を提示することで、児童の側に体を向け、児童の様子を確かめながら学習を進めることができた。
- ・既存のデジタル教材が児童の実態や教師の意図と合わない時は、フリーソフトなどで少し手を加えることにより、授業で使いやすい教材にすることができることが分かった。

〔仮説2〕について

- ・実際に児童が活動している場面をデジタルカメラを使い静止画や動画で記録しておくことで、授業の振り返りの場面や、別単元の同内容の学習などで活用することができた。自分たちの姿が手本の教材になるため、児童はより意欲を高

めて学習に臨むことができた。

〔仮説3〕について

- ・普通教室でもインターネットにつながられるように、LANケーブルや無線LANを整備したことで、Webサイトを授業で活用することができるようになった。
- ・電子黒板やプロジェクターなどのICT機器を教室に固定設置することで、様々な学習場面ですばやく、効果的に活用することができるようになった。
- ・外国語活動の教材の「英語ノート」や「Genki English」の特徴をまとめたり、実際に授業で使用したりしたことで、より効果的な活用方法について考えることができた。
- ・既成の資料や教材を、教師のねらいに沿って手直ししていくことで、より使いやすく、児童の実態に合った教材となることが分かった。また、同じ教材でも、提示の仕方を変えるだけで活動に幅が出てくることを学べた。

【課題】

〔仮説1〕について

- ・教師がICT機器を操作して学習を進めるだけでなく、より注目させる意味で児童にも操作させる場面をつくることも必要である。

〔仮説2〕について

- ・児童の活動中、個別指導をしながら活動の様子を記録するという煩雑さが感じられる時があった。児童が困った時は自分の力で調べることができたり、手助けとなったりする教材を準備しておく必要がある。

〔仮説3〕について

- ・電子黒板やプロジェクターなど使用できるICT機器が変わった時、今あるICT機器をどのように関連させて活用していけるかについて、今後も継続して研修していく必要がある。
- ・本研究を通してICTを使用して指導することの効果を実感することができた。しかし同時に、黒板や紙の教材の良さも再認識することができた。それぞれの良さを生かしながら学習を進めることができるように今後も研修を継続したい。